

都道府県別賞一等

見守る保険と見守られる心強さ

富山県 高岡市立高岡西部中学校 三学年

上坂 粹生

ある時は、雪かき中に骨折。またある時は、ハシゴから落下。父さん曰く、じいちゃんは昔から四年ぐらいを周期にケガや病気で入院するオリンピックじいちゃんらしい。じいちゃんは六人兄弟の末っ子で、学校を出てすぐ働き始めたそう。早くにお父さんを亡くし女手一つで育ててくれたお母さんに心配や負担をかけたくないという思いで若いうちから保険に入っていた。

ぼくが一番覚えているのは、じいちゃんがハシゴから落ちて一週間後くらいに

「あかんわ。頭割れそうに痛い。足も感覚なくなってしもて動かん。」

と突然言い出し、母に病院へ送ってもらった時の事だ。ハシゴから落ちた時に頭を打って血が溜まり、神経を圧迫し始めたのが原因で頭痛と足の神経麻痺が起こり、緊急手術になった。もう元気に動き回るじいちゃんには会えないかもしれないと思うと涙があふれた。二日後、父さんが見舞いに行くと言うので、ぼくも恐る恐るついて行った。病室のじいちゃんは頭にチューブが刺さっていて、溜まっていた血がチューブの中を流れているのに、病院食をパクパク食べていた。

「じいちゃん、大丈夫？」

と声をかけたら、

「おら、若い時から保険に入っとるから大丈夫や。何も心配いらん。」

と言った。じいちゃんは入院費用が大丈夫かぼくが心配していると思ったのだらう。

ぼくは三歳の時、扁桃腺が腫れ上がり二十四時間抗生物質の点滴が必要になった為、急入院する事になった。母は、「まだ粹生の保険入ってないのに入院なんて、どうしよう。」と言って青ざめていたのを思い出した。個室しか空いていなくて、一日一万円もする部屋だったので高額の入院費がかかった。退院後、父は、「お兄ちゃんは喘息やったからすぐ保険に入ったけど、粹生はまだ大丈夫かなと思って入ってなかったわ。ごめん。」と言って慌ててぼくの保険をかけてくれたのだった。

じいちゃんは病院食をパクパク食べながら、「早よ退院してまた一生懸命働かんなんな。おらが入院やら病気やらして困った時に助けてもるとるから、おらが元気になったら払っとる保険料で誰か見守ってあげんなんな。ほんま、保

## 第61回中学生作文コンクール

険のおかげで何があっても恐ろしいわ。心強いちゃ。」  
と言った。ぼくもじいちゃんに同感だ。そっと見守ってくれている誰かがいると思うとものすごく心強い。それが証拠で父が保険をかけてくれて以来、ぼくは一度も入院するほど大きな病気にかかった事がない。この社会で生きる人みんなが見守る側にも見守ってもらおう側にもなれる、それが保険だ。じいちゃんの入院は、保険の果たす精神的サポートの役割も教えてくれた。ぼくも見守ってもらおう側からいずれば自分で保険に入り、誰かを見守る側になりたいと思っ

た。  
御年七十四歳のじいちゃんは、毎日保育園バスを運転し、園児たちのパワーをもらって元気に働いている。若い時から家族を思いやり保険に入っていたじいちゃんが、何事も恐れず生き生きしている秘訣は、

「おら、若い時から保険入っとるから大丈夫や。」  
にあった。